

「道徳の時間」の指導について

庄子 豊

はじめに

「道徳の時間」の授業を参観する機会を得た。道徳資料を基に、活発な話し合いをしている児童の姿を見ることが出来た。

しかし、児童の発言が終始第三者の立場に留まっていて、「私にとっては〇〇のこと」というように、自分自身の問題となっていないというところを感じた。これは、教師の指導に課題があるといえる。

何故なら、「道徳の時間」は、児童・生徒が望ましい生き方（価値）は何か、主体的に追及・把握する指導が必要であるからだ。その上で、本時の学習で得た、より高い価値観に照らして、今の自分をふり返り、自分を深く見つめる時間なのである。

本稿は、やがて教師として「道徳の時間」を担当する学生に、「今の自分をふり返る段階」に繋がる指導をしてほしいと考え、「指導過程」や「語り合い」に絞って、Q & A方式でまとめたものである。

その1：指導過程について

導入（自分の問題として意識する）→**展開**（資料を読む視点を与える・自分と主人公の異同を探る・価値の把握をする・自分をふり返る）→**終末**（実践意欲を高める）に沿っての記述とした。

Q 導入はどのように扱うのか？

A 自分の問題として、本時学習する課題を意識する段階です。この段階で大切なことは、児童・生徒たち一人ひとりが本時学習することを、自分の問題として意識しているかどうかを、極めて大切です。この押さえが十分でないと後段の「自分を振り返ること」に繋がりません。ここでは、建前と現実のずれに気づかせていくことが大切です。その他に、

- ・実態を細かくとらえ、投げかけます。事象面だけではなく、その行為の原因・背景を出させていきます。
- ・写真、本、ビデオ等、視覚に訴えて意識づけを図るとよいです。

Q 学習課題の提示はどのようにするのか？

A 学習課題とは、「児童・生徒が本時で何を考えるのか」という学習の見通しとなります。教師が、本時のねらいから見た児童・生徒の道徳的な問題を明らかにして、投げかけるものです。

それを受けて、「自分は、どんな時のどんなことについて考え直す必要があるのか」一人ひとりの学習問題へと繋いでいきます。

Q 資料の扱いについて教えて？

A 次の点に留意して、資料を扱っていくことが大切です。

- ・より高い価値を得るために活用します。
- ・一読して、無理なく理解できる内容である

ことが必要です。

- ・主人公に迷い、葛藤が出ているものがよいです。
- ・学級の実態に合わせて、資料を一部修正してもよいです。ただし、よく吟味しないと価値がつかめなくなるので、基本的には、あまり勧めません。

Q 資料を読む段階で気をつけることは？

A

- ・およそのあらすじを述べてから、読む視点を与えることが大切です。
- ・資料に書かれていることは問わないことが大切です。国語の読解ではありませんので、行間にあるものを考えていくことが、より高い価値に迫ることにつながります。

Q 資料のポイントと発問の仕方は？

A

○ポイント

- ・価値を実現している登場人物の言動が表現されている箇所
- ・価値の実現に反することが表現されている箇所

○発問の仕方(例として)

- ・価値を実現している場合の例として、「主人公が、このようにうれしい気持ちになれたのは、どのような考えで乗り越えていったからかな？」
- ・価値の実現に反する場合の例として、「登場人物がこのようなことをしたのは、どのような考え方からかな？」

どちらも、児童・生徒一人ひとりが自分の問題としてとらえやすくするために、発問を吟味していくことが大切です。

Q 資料から価値を把握する視点は？

A

次の「自分をふり返る」ところで、何についてふり返るのか、はっきりさせるための大切な段階です。

- ・主人公にそうさせたものは何かに視点をあてるとよいです。例えば、「乗り越えさせたものは何だろう。」等が考えられます。
- ・「なるほど、こういう考えが大切なのだ。」と気づかせることが大切です。例えば「この話から学んだことはどのようなことだろう。」等が考えられます。
- ・「価値把握」の部分を書きによって、確認することも大切なことです。

Q 資料はどのような型があるのか？

A

ここでは主な型を挙げてみます。ただ、これらの分類は、便宜的なものですから、扱い方はこうであるという類型化は、資料の活用を制約しますので避けてください。

- ・葛藤教材～道徳的価値についての理解を得させ、判断力を練るのに有効です。
- ・対比教材～二者を比較し、よりよい生き方を追求させようとするものです。
- ・感動教材～児童・生徒たちの内面に訴えて深い感動を呼び起こし、心情を豊かにしようとするものです。

Q なぜ、資料を使うのか？直接経験を中心にしてもよいのでは？

A

間接的な道徳資料を用いるよりも、児童・生徒たちの直接的な体験を取り上げた方が切実感があり、主体的に学習できるのではという声を聞くことがあります。しかし、次の理由から、直接的体験の扱いは避けます。

- ・道徳の問題は、基本的に個々の内面的、自覚的な問題ですから、その体験には個人差があります。
- ・学級全員の学習問題として、共通化することに難しさがあります。
- ・直接的な体験は多分に偶発的で、取り上げる内容に偏りもあり、計画的・発展的指導という上で問題があります。また、より高い価値に気づくことに対して、目が開かれないことが考えられます。

そこで、

- ・学級全員が共同思考を通して道徳的価値についての学習がしやすいこと。
- ・道徳内容を計画的・発展的に指導出来るということ。

等から、第三者の道徳的体験を内容とする資料を中心に「追体験により道徳的価値の理解と広がりを図る」という方法が主となっています。

Q 役割演技(ロールプレイ)について教えて？

A 道徳的心情・判断について考えさせる上で効果があります。

どのような状況下での問題場面なのかよく理解させてから行います。ねらいに迫るには、それぞれの行動を支える理由が均衡するよう場面設定をすることが必要です。

- ・葛藤場面やねらいとする価値に反する場面で行うとよいです。
- ・登場人物の価値の実現部分や、喜びの場面は、ただ「うれしい。ありがとう。」等で終わらないよう配慮が必要です。

Q 自分を深く見つめる段階(ふり回り)は

A 「道徳の時間」で、一番大切な段階です。

本時の学習で得た、より高い価値に照して、自分をふり回り、深く見つめる段階です。

今の自分をふり返させるには、価値を把握する段階のところで、ねらいとする価値の意味を確実につかむことが大切です。

また、一人ひとりの児童・生徒の様々な考えや感じ方に合わせることが大切です。

「これからはこうしたいと思います。」という、決意表明的な語りは避けたいです。

ふり回りは、学習課題に対して、学級の児童・生徒数分の考え(答え)が出てきます。

Q 終末では？

A 実践意欲を高める段階です。

友達の作文や担任の説話等を通して実践意欲を高めます。また、校長や、保護者の方や地域

の方の説話を聞かせることもよいです。担任自身が体験したこと、感動したこと、努力したこと等を児童・生徒に語ることは大切なことです。

教師が、「これからは、こういうことを忘れずに、こうしよう」というような押しつけで終わらないことが大切です。「余韻」を残して終わることが大切です。

その2:「語り合う姿」をめざした指導

教師主導の一問一答で進められる授業では、多様な価値観に出会うという点で、難しさがある。自分の考えを友達に伝え、友達の考え方や感じ方を素直に受け止めるという「語り合い」によって、自分をより深く見つめることに繋がるからである。

Q なぜ「語り合い」が必要なのか？

A 道徳の時間の話し合いでは、資料や生活経験を基に、各自が自分の考えや感じたことを述べたり、友達の多様な考え方・感じ方を聴き取ったりします。

ただ、道徳の時間の話し合いは、結論を導き出すためや、相手を説得するためのものではありません。ある一定の価値観を伴った話に触れながら、より確かな価値に気づき、それに対して、「今の自分」はどうか、「語り合い」によってふり返ることが出来るのです。

道徳的価値は、現実の生き方の中では様々な姿をもって表されています。学級内の児童生徒一人ひとりの「様々な価値観」に出会わせていくことが大切なのです。

Q 「語り合い」を成立させるための前提条件は？

A 「語り合い」で一番大切な点を述べます。教師は、次のようなことに配慮する必要があります。

- ・学級が、お互いに何でも話せたり、聞いたという雰囲気であればなりませ

ん。認め合い・励まし合いが、さりげなく出来ている学級となっていることが大切です。

- ・他教科・領域においても、自分の考えを進んで発言したり、人の話をしっかり聴いたりする態度を養っておくことです。
- ・教師がゆったりとした態度で児童・生徒に接するなど、「間」を大切に作る姿勢が求められます。

さらに、形の上で次のような点が大切です。

- ・机の配置を「コの字型」にするなど、語り合いがしやすい工夫をします。
- ・話す友達に目を向けて聴くことや、頷きながら聴くことを指導しておきます。
- ・児童・生徒同士の「相互指名」によって、関連したことを「語る」・「聴く」が出来る姿をめざしていきます。

Q 「語り合い」を成立させるための手立ては？

A 児童・生徒どうしの語り合いで、他の人の考えに共感したり、別な考えを述べたりしながら、価値観を高めていくようにします。

そのためには、

- ・本時の課題を、「私にとっては〇〇のこと」というように、自分自身の問題として意識させておくことが大切です。
- ・発言の背景にあることを掘り下げたり、発言を「共通の場」に広げたりするために、※「切り返し」を図り、より高い価値に気づかせていきます。
- ・新たに生まれた見方・考え方を表した時には、「友だちの考えを聴いて、自分の考えを高めているね。それが、とても大事なことなのだよ。」と、大いに認めていくことが大切です。

※「切り返し」～主発問に対する応答をさらに掘り下げる発問を「切り返しの発問」といいます。「切り返し」は、「共通の場」に広げたり、思考の観点を切り替えたりする場合も使われます。

まとめ

「道徳の時間」の指導について、講義の中やアンケートの中で、質問があった点を含めてQ&Aで記述した。しかし、質問項目については、「板書の仕方」や「指導案の書き方」等、他にも大切な点がまだある。その点については、別な機会に触れることにして、最後に、「道徳の時間」の指導で大切な基本の考えを述べて、まとめとしたい。

◎授業として、

「児童・生徒の実態→本時のねらい→学習課題→資料」が連動していることが必要である。

◎教師の姿勢として、

「よりよく生きたい」という児童・生徒の願いに応えるために、児童・生徒と教師の人間関係を大切に、共に考え、共に探求していく姿勢で授業に臨むことが極めて大切である。

【参考文献】

日澤一男：道徳の時間の指導をより充実するために1993
学習指導要領解説 道徳編 文部科学省